

飯島賢二の『恐縮ですが...一言コラム』

第 303 回 桜と日本人 ~滅びの美学

2009.3.22

桜が日本中に咲き誇り、何となく、ほのかな気分にさせてくれる、そんな季節になった。桜は日本人にとって、やっぱり、格別な思い入れのある花だ。咲き具合に一喜一憂し、蕾が開く時から散り終わるまで、その時々^{つぼみ}の姿に自分の心を重ねて、儂さや潔さ、妖艶さなど、色々な想いを抱かせてきた。その思い入れは、人によってマチマチである。

今我々が見ている桜は、「ソメイヨシノ」という種類の桜がほとんどである。これは、江戸時代に染井という植木屋が、江戸彼岸桜と大島桜を掛け合わせて作った新種の桜である。この桜は何と言っても成長が早いことから、全国的にヒットした。しかし、その反面寿命が短いのが欠点で、どんなに長生きしてもせいぜい百年位しか生きない。しかも、人間に植えてもらわないと増えないという桜である。何か現代の若者に通じるようなひよわな「もやしっ子」のような感じがする、人工の花と言っている。

そうはいつでも、花盛りは刹那、散り際は潔く...はかなくも美しく散ってゆく桜の花に、多くの日本人が自ずと理想的な人生観を重ね合わせ、共感を覚えてしまう。花自体にも、華やかながらも決して熱帯の花に見られるような原色的な華美さはなく、どちらかといえば控えめな美しさであるところが、何としても日本人好みであり、日本人が愛してやまない、それが桜なのだと思う。

そして、桜の花の「散り様」には、かつての日本人の美意識であった、仏教的無常観のようなものを見ることが出来る。そう、桜の花はむしろ散り際こそが美しいのかもしれない。あっという間に咲いて、あっという間に散っていく...日本人の美意識の中に「滅びの美学」というものがあるとすれば、桜は、この滅びの美の極致の花と言ってもいいかもしれない。

この滅びの美学の起源は、「平家物語」にあるといて言い、ご存知平家物語は、壇ノ浦の戦いで滅びた平家一族の滅亡を描いたもので、琵琶法師という当時の「語りべ」達によって、全国に伝えられた。この滅びの物語は、その後の日本文化に強烈な影響を与え、能や歌舞伎などの多くの題材になった。しかし、平家物語は単なる、平家の滅亡ドラマだけでは終わらない。「盛者必衰の理」の教えが根底にある。「盛者」とは、もちろん今まさに栄えて絶頂を極めている者であり、「必衰の理」とは、必ず衰退するという法則の意味である。平家物語の中にはすでに、源氏滅亡を予感している。

平家物語の中には、もう一つ「諸行無常」というキーワードがある。これは仏教の言葉で、「この世のあらゆるものは変化してやまない」という意味である。その真意は、滅び行く者や自然に対する限りない思いやりの念...つまり「侘び」「寂び」であろうと思っている。

日本人の桜好きは、~平家の滅亡や源氏の滅亡の歴史の中で、延々と醸成されてきた、日本人固有の心情である~と言えば、少し、屁理屈が過ぎるだろうか？

いやはや今は、平家の悲劇のことはすっかり忘れられ、満開の桜は宴会の口実と化した。桜の木の下はどこも満員電車のような有様、そんな様子を見ると、桜は遠くから眺めるのが一番と思っている。大勢で鑑賞するというよりは、ひとりひとりが桜の心にゆったり向き合うというような...、そんな緩やかな時間を取り戻すことが、現代では一番の贅沢なことなのかもしれない。日本人の桜下^{あうか}の一種異様なまでの享樂は、このような深いイワレがあったこと、静かに思い出して欲しい。